

- 27) 前掲櫻井 c.
- 28) 『京都新聞』2005(平成17)年10月14日朝刊、湖国三大祭りの一つである大津祭の曳山巡行はこれまで任意の団体であったが、平成17年からNPO法人を取得した大津祭曳山連盟によって運営されることになった。400年の伝統を持つ祭礼がこれまで各町の自治会などが個々に運営にあたってきたが、町内の人口減少や高齢化などで年々負担が強まり、NPO法人の指定を受け、祭りを活かした中心市街地の活性化策を訴えてゆくことにしている。
- 29) 前掲櫻井 c. 以下、関連する文章の一部を掲げておく。

…地域福祉を担う組織として、NPO活動などへの期待が寄せられていることも確かです。NPOの中には、かなり専門的な知識集団、行動集団として活動をされている団体もあり、福祉領域だけではなく、環境問題で活動するNPOを立ち上げている神職の方々もおられます。

こうした活動と、どのような連携が可能かということもこれから検討する必要があるように思います。地域の祭りの担い手が少なくなったので、NPOで継承しようという動きも見られます。そこでは、地縁や社会縁だけで構成される祭祀組織とは違った、祭り結合の組織が発生するかもしれません。こうした動きに神社がいかに向き合うか、新たな発想に期待したいところです。

地域社会に基礎を置いた神社の将来は、地域社会のニーズを先取りし、地域社会の「お宮」として近寄りやすい、親しみの持てる環境づくりにかかっているように思います。

## 立正佼成会学林教育の理念とその課題

篠崎友伸

### はじめに

学林は、昭和39年4月8日、時代感覚を身につけた実践的な宗教者をつくる大学院ともいえる子弟の教育機関として発足。顧問の先生としては、中央大学の小松春雄教授、前東京外語大教授の増谷文雄教授、駒澤大学の水野弘元教授で、研究生の3名にてスタートした。学林生は、大学を卒業した熱心な信仰者を毎年4月に採用。2年間にわたって政治・経済・法律・社会学などとともに徹底的な仏法の研究と修行を行なう目的で創設された。研究科は、昭和43年12月に本科に籍を置く者で、海外留学する者を対象として設置された。国内外の大学院等で専門的な分野で学び、将来学問的、国際的分野で活躍する人材の養成プログラムである。

昭和45年4月1日学林は、布教本部教育課より独立。同時に学長制度が新設され初代学長に庭野浩一氏(現・日鑑会長)が就任。学林は3年制になる。また、昭和49年3月に学林の寮が養成館へ移転。

学林は、本科・研究科・女子専修科(後に芳潤女学院に発展)・予科(光湖)へと分化発展して現在に至る。

昭和49年8月22日に、高校卒業以上の女子を対象とした二年制の女子専修科が新設された。その教育理念は、女子専修科は、仮性を開顯したよき婦人であると同時に、将来の女性のリーダーとして教会で活躍できる人材で、かつ、明るい社会を築いていくような人材をつくりあげる教育機関としてつくられた。

昭和50年4月8日予科が新設される。予科は、首都圏の大学に通う大学生・大学院生を対象とし、寮生活を通して法華経の精神を行学二道にわたって

研鑽できる教育機関である。将来、信仰をもった社会のリーダーの人材育成を目標としている。(最近では、東京の養成館に毎年15名(女性が少し多い)ほど入寮している。

平成6年4月7日に女子専修科(20期生が最後の期となる)は、芳沢女学院情報国際専門学校に生まれ変わった。入学者は毎年約70名。同年に海外の青年信者に対して、2年制の海外修養科も発足、毎年5名ほど採用している。

平成16年4月 関西光済館にて、大阪周辺の大学生を対象として光済大学科関西光済生1期生が入林(毎年10名ほど入寮)。同年本科新コース(2年制)に改編、採用人数は毎年10名ほどで、3コース(布教研修コース、語学研修コース、および、専門研究コース)に細分化された。専門研究コースは、外部の大学院博士課程または、研究所にて研究員になりうる人材を対象とする。また、同年、光済科通信課程教育(大学・大学院生を対象)が始まるが、少人数である。

各科の卒林生に関しては、以下の通りである。本科卒業生は、主に教団に奉職し本部や教会展として活躍している。現在、全教会長245名の内、本科卒業生は35パーセントを占めている。(女性一名以外はすべて男性)。専修科卒業生は、各教会において、教会のリーダーとして多くの方が信仰活動をしている。また、予科の卒業生は、半数ほどは教会のリーダーをしながら社会で活躍している。

平成17年4月現在の卒業生総数は、1,691名であるが、その内、本科卒業生数は312名(その内女性は30名)で、研究科卒業生は約30名である。その内、博士の学位を得た者は4名である。その他、予科・光済卒業生は209名、専修科卒業生は459名、芳沢女学院卒業生は679名、そして、海外修養科卒業生は34名である。

## 1 学林建学の基本理念

学林建学の基本理念は、開祖庭野日敬<sup>ひづきのひの</sup>のご法話(昭和39年1月の『躍進』年頭ご法話「世界の俊成会たらん」)及び昭和43年3月の学林パンフレット「学林にのぞむ」にご教示されている。ここに引用したい。

本会の学林に籍をおく皆さん方が広く宗教その他の専門知識を学ばれ、本

会の布教はもとよりのこと、あらゆる面で役立つ人物に育ってもらいたい。かかる願いが、学林創設の意義の根底に流れているわけであります。言うなれば、本会の中核たるべき法の器、人材を育成するという希望と期待が、皆さんに向けられていることを自覚して頂きたいと思うのであります。この自覚こそが發菩提であり、それをしっかりとふまえて行学二道に研鑽されてこそ、その期待によく応えることができるのです。(開祖庭野日敬「学林生にのぞむ」)

それを、要約するならば、第一に、学林生自身の自覚(菩提を求める心)にもとづく人材育成の大切さ、第二に、人材の育成とは、「本会の中核たるべき法の器」(法器とは仏法を受容し、信受しうるに足る者)を育成すること。つまり、仏法を求める信心決定教育をすること。第三に、人材の育成をはかるためには、行学二道に研鑽することのできる教育体系が学林に望まれていることであった。そして、これらをふまえて学林を充実発展させていくことが重要である。

まず、学林教育が担うべき役割は、会員綱領に示されたごとく、会員が人格の完成かつ寂光土(世界平和社会)建設にむかって精進できるよう、本教團の因縁使命を果たす上に必要な人材の育成の場であるということである。それは、開祖庭野日敬のご法話(昭和39年1月の『躍進』年頭ご法話「世界の俊成会たらん」)に以下のごとくご教示されている。本会百年の土台を築く上で、時代感覚に秀でた新進気鋭の幹部の養成が急務であるとし、学林の創設について語っている。「いわば実践的な宗教者をつくる大学院です。大学を卒業した熱心な信仰者を採用し、政治・経済・法律・社会学など専門分野の大学院より學問を究めることをする一方、一定期間寝食を共にして徹底的な仏法の研修と修行をさせ、菩薩道の先駆者として身・口・意三面において文句なしに大衆をリードしてゆけるような人物をつくろうというのです。」要約するならば、第一に、学林は実践的かつ信仰の厚い宗教者をつくる大学院的な性格をもつ幹部養成機関であること。第二に、寮生活を共にし、身・口・意の三業(三つの行い)にわたる全人教育をすること。第三に、大衆をリードしてゆけるような菩薩づくりを行なうことが学林教育と制度に望まれたのである。学林の教育と制度は、庭野日敬初代学長によれば「本会百年の土台」を築くために展開してきた子弟教育の一翼を担ってきたものである。「一年の計は穀を樹うるに如くはなし、